

性的少数者と私たちのセクシュアリティ

のりまつ よしこ
則松 佳子

●日本教職員組合・書記次長

2015年3月に渋谷区が「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」、いわゆる「同性パートナーシップ条例」を可決・成立させたことを契機に、この2年、性的少数者を表す「LGBT」という言葉がよくメディアに登場するようになった。以前に比べて肯定的な記事や声も増え、性的少数者であることを明かして活動するタレントへの番組の対応なども、多少変化したように感じる。

そもそも、多様性を呈する他の生物と同様に、私たち人間の性も個性豊かであるはずだ。ではなぜ少数者の存在が見えにくかったのか。それは、「この世には男と女しかいない」「人は異性を好きになるもの」という前提で動いている社会において、「自分はそれに当てはまらない」と自覚している人はずっと息をひそめて生きてきたからである。それが、「性のあり様は人それぞれだよ」と言う声が広がり始めたことで、ゲイ/レズビアンであること、バイセクシュアルであること、あるいは、身体と心の性が異なるトランスジェンダーであることなどを明かす人が少し増えてきた。

私や仲間が勤めてきた高校現場においても、自分の性のあり様が「みんなと違う」ことに悩み、自室に引きこもったり自暴自棄になったりする子どもたちはいつでもいたはずである。しかし、教職員が子どもたちの不登校や「荒れ」の背景にそのような悩みがあり得ると気づきはじめてのは近年で、むしろ教室では教員も他の

子どもたちとともに性的少数者をからかうような言動を平気で見せてきてしまった。成人したのちに自分がバイセクシュアルであることを私に話してくれたかつての教え子に、「何で高校の時に話してくれなかったの？」と問うと、「担任になんか言えるわけじゃないじゃん」と言われてしまった。

教職員が当事者生徒からの信頼を取り戻すのは、これからだ。

LGBTはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字を使った言葉だが、性的少数者には他にも、性分化患者や、異性装者、性的欲求のないア・セクシュアルと言われる人なども含まれる。自分自身の性別認識（性自認）と、恋愛感情を抱く相手の性別は何かということ（性的指向）とは別物であることまで含めて、性の多様性が社会に十分認知されるには、まだ時間がかかりそうである。加えて、この状況を新たなビジネスチャンスとしかとらえていない一定層の存在も見え隠れする。

性的少数者が生きやすい社会の入口に、私たちはようやく到達したばかりだ。今、セクシュアリティ（性のあり様）についての啓発を徹底しなければ、大きな揺り戻しが起こり、性的少数者を更に追い詰めかねない。どんなマイノリティに対する差別解消も、人々の学びと気づき、つながりあいを綿々と繰り返していくこと、それしかないと考えている。